を導入した昭和二六年以降約四〇年間で抜本的な改正は行われていない。二一世紀を踏まえたあらたなビジョンが必要であろう。

（大阪府豊中市・皮膚科）

51 米国長老教会婦人宣教師ミス・リードの日本における活動

平尾 真智子

ミス・リードは米国長老教会の婦人宣教師で、わが国で最初に看護婦の教育を行った人物である。彼女は一八八一年に来日し、一八八八年にミッションを辞任するまで約七年間日本に滞在した。今回、アメリカにある長老教会の歴史資料館でリードに関する資料を得る機会があり、それにこれまでに得られている日本側の資料を加えて彼女の日本での活動をまとめたい。

リードはニューヨーク婦人伝道協会の所属であり、一八八一（明治十四）年十月二十九日に来日した。そして現在の女子学院の前身であるグラハム・セミナリーでI・A・リート、ミス・スミス、L・A・リートらと一緒に働いた。彼女はここでアシスタントをし、一日二時間教えている。

彼女は日曜学校もしていて参加者も多かった。また、一八八三年から一八八四年までのミセス・ツルーが帰米している期間にリードは桜井女学校でミス・デービスを補佐した。

長老教会のジャパンミッションは、一八八四（明治十七）年九月二十四日に東京の慈善病院の医師高木兼寛の要請で会議を開き、十月三日リードが病院で仕事をすることが許可された。高木がリードを病院に招くことができたのは、長老教会の婦人宣教師たちの慈善病院への伝道活動がきっかけとなったとも考えられる。リードと同じニューヨーク婦人伝道局派遣のミス・ヤングマンの開設した築地第一啓蒙夜学校の生徒は、明治十六年から毎週土曜日に果物と草花を持って慈善病院の慰問を行っていた。また、マクネア夫人やブライアン夫人はフラワーアンドフルーツミッションと称して明治十七年より慈善病院の訪問を行っていた。

リードは十月十七日より慈善病院の有志共立東京病院を訪れ、以後毎週金・土の両日看護法を教授した。一八八五（明治一八）年一月七日より二年間無給で同病院に勤務する契約がなされた。彼女の服務時間は、一日四時間で下婢二名と部屋を二つ用意された。また、病院内におけるキリスト教の伝道も許されており、入院患者にイエスの話をしている。彼女は病院で貧しい病人の看護を行った。同年の三月からは成医会医学校の医学生に英語を教授している。リードは病院で、派出看護の仕事の準備にあたった。リードは病院に住みすべての時間を病院での時間に捧げていた。彼女は病院にいた二年間に看護婦帽子五十四個、看護婦前掛け二十六枚、団扇二十六本、哺乳器などを寄付している。リードは日本の慈善病院での活動を本国の婦人伝道局の機関紙「婦人のための婦人の仕事と私たちの伝道地」に報告している。リードは看護婦たちを新栄教会に導き、彼女に教えられた看護たちはクリスチャンになるものが多かった。

米国長老教会では、リードの慈善病院での活動とは別に、明治十九年に桜井女学校のミセス・ツルーがバラ夫人の遺志を継ぎ、日本に看護婦の養成所をつくるという計画をもっていた。看護婦学校開設のための資金も集められたが、看護養成は宣教師の本来の活動ではないとする、ミッション内部からの反対もあってこの計画は順調にはすすま

なかった。リードの病院での活動と、ツルーの看護学校の計画は、本国の婦人伝道局の機関紙の日本欄に同時に報告されたため、本国でもこの二つの養成は混同して理解されていた。

リードと高木の契約は二年間であったが、契約の期間を越えた一八八七（明治二十）年になっても彼女は病院での仕事をしていた。彼女の本来の仕事は女子教育活動にあったが病院での看護教育活動に熱心で、このことが宣教師としての職務から逸脱した行為とみなされるようになっていったようである。その後リードは新栄女学校（グラハムセミナリー）に戻り、日曜日には聖書のクラスも継続し、生徒に音楽を教えた。一八八八年リードはミッションを辞任し、五月十九日に英国船ザンベシ号でアメリカに向けて帰国した。

リードは日本で最初に看護婦を教育した人物であるが、その人物的背景には不明な点が多い。彼女は日本での活動は、日本の看護教育の導入期の事情を知るうえでも鍵となるものである。リードがニューヨークに関係があることから同地の長老教会病院の関係者である可能性も残されているので今後も調査を継続したい。

（慈恵看護専門学校）